

# 「落花生」生育情報（第1報）

～ 基本技術を励行して収量増加！ ～

令和3年7月20日  
千葉県農林水産部  
生産振興課

※本資料は、落花生生産者へ落花生の生育情報を提供するものです。  
調査時点での生育状況をまとめたものであり、本年の収量を予測するものではありません。

## 1 生育状況

は種時期の5月下旬から6月上旬にかけて、気温が高めに推移し、晴れた日も多く、発芽や発芽直後の生育は順調に推移しました。しかし、6月下旬以降は、気温は平年よりも低めに推移し、日照時間は少なく、降水量が多くなっています。

作況調査ほ及び落花生研究室のほ場では、各品種とも、最長分枝長は平年並みかやや短く、乾物重がやや軽く～軽くなっています。

なお、開花までの日数は、標播（5月20日播種）が平年と比べて1～2日程度遅く、晩播（6月9日播種）が平年並みか1日遅くなっています。

表1 作況調査成績（7月10日調査）※対比は日数、又は平年比

品種名	年次	は種日	最長分枝長 (cm)	地上部 乾物重 (g/m <sup>2</sup> )
千葉半立	本年	5月29日	15.0	31.0
	平年	5月30日	14.5	61.5
	対比	—	102%	50%
ナカテユタカ	本年	5月23日	15.2	111.8
	平年	5月22日	16.5	123.0
	対比	—	92%	110%
おおまさりネオ	本年	5月23日	16.8	97.0
	平年	—	—	—
	対比	—	—	—
千葉P114号 (Qなっつ)	本年	5月31日	13.0	40.0
	平年	6月1日	13.4	71.1
	対比	—	97%	56%

\* 本年値は、各調査地点の平均値。「千葉半立」は千葉・印旛・香取・山武地区、「ナカテユタカ」は千葉・海匝・長生地区、「おおまさりネオ」は千葉・印旛・君津地区、「千葉P114号(Qなっつ)」は印旛・香取・長生地区。

\* 平年値は、平成26年から令和2年（過去7年間）の調査データから最大・最小を除く平均。ただし、「千葉P114号(Qなっつ)」のみ平成28年から令和2年（5年間）の平均。

\* 「おおまさりネオ」は本年から調査開始のため、平年値及び平年値との対比はない。

\* 対比はラウンド処理をしているため、小数点以下が合わない場合がある。

表2 (参考) 落花生研究室 (八街市) の作況 (本年の値、7月10日調査)

播種時期	品 種 名	開 花 期		最長分枝長 (cm)		地上部乾物重 (g/m <sup>2</sup> )	
標 播 (5月20日 播種)	千葉半立	7月 1日	(2日遅い)	18.7	(100%)	103.1	(94%)
	ナカテユタカ	6月28日	(1日遅い)	13.9	(79%)	84.6	(76%)
	千葉P114号	6月30日	(2日遅い)	16.6	(91%)	98.5	(87%)
	おおまさりネオ	6月28日	(1日遅い)	17.4	(97%)	94.9	(81%)
晩 播 (6月9日 播種)	千葉半立	7月15日	(1日遅い)	10.3	(97%)	22.1	(79%)
	ナカテユタカ	7月13日	(1日遅い)	9.4	(94%)	21.5	(75%)
	千葉P114号	7月15日	(1日遅い)	10.0	(104%)	22.6	(83%)
	おおまさりネオ	7月13日	(同じ)	10.2	(100%)	30.8	(108%)

注1) 栽植密度は5,128株/10a  
2) カッコ内は、平成28～令和2年の平均値対比を示す

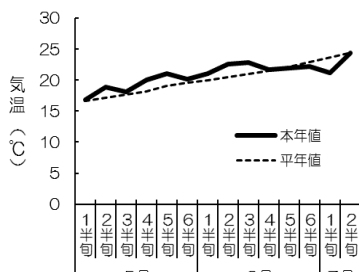


図1 気温の推移 (アメダス、佐倉)

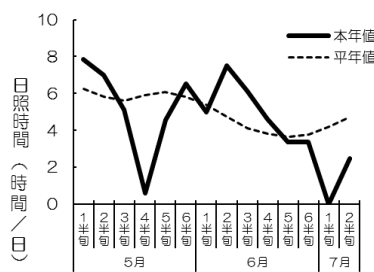


図2 日照時間の推移 (アメダス、佐倉)

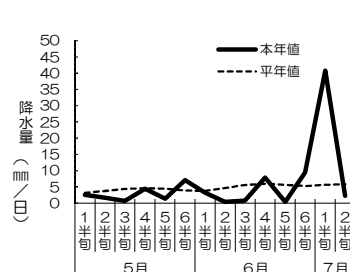


図3 降水量の推移 (アメダス、佐倉)

## 2 これからの管理のポイント

### (1) 十分なかん水を行いましょう

7月中旬～8月上旬は、落花生の子房柄が伸長して地中で莢が肥大する時期です。この時期に干ばつ害を受けると、空莢や未熟粒が発生し、収量が大きく減少します。

また、8月上旬以降に干ばつに遭うと、幼芽褐変症が発生しやすくなり、種子に発芽障害が生じます。そのため、

- 開花期後20日頃から、週1回を目安にかん水し、  
採種する場合は、開花期後40日頃にもかん水しましょう。
- 1回のかん水量は、30ミリ以上の「十分なかん水」を心がけましょう。

(参考)

開花期後20日にかん水すると、稔実率が上がる。



図 開花期後のかん水有無の違いによる子実の状況 (平成27年千葉県農林総合研究センター) (ガラスハウス内枠ほ場での調査結果、開花期後40日の子実の状況)

### 3 病害虫の早期発見・早期防除を徹底しよう！

(※) 農薬は、農薬取締法に基づいて、使用できる農作物の種類、適用病害虫、希釈倍率、収穫前日数、総使用回数などが定められています。ラベルをよく読んで、適正に使用しましょう。

**「茎腐病」** 茎の地ぎわ部が腐り、地上部がしおれ、やがて枯死します。発生が認められたときは、ほ場には**トップジンM水和剤、ベンレート水和剤**を散布し、被害株はすぐに抜き取り、表土と一緒にほ場から持ち出し処分しましょう。



薬剤名	希釈倍率	使用液量	使用時期	使用回数
トップジンM水和剤	1500倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	4回以内
ベンレート水和剤	2000倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	4回以内

**「白絹病」** 高温・多湿条件下で発生しやすく、地ぎわ部が侵され白い菌糸が密生し、やがて発育不良となり、枯死します。例年発病するほ場では、**フロンサイド粉剤**を株元に散布しましょう。発病した場合は、被害株をすぐに抜き取り、表土と一緒にほ場から持ち出します。



薬剤名	使用量（倍率）	使用時期	使用回数
フロンサイド粉剤	20kg/10a	収穫45日前まで	1回
アフエットフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内

**「褐斑病」** 葉に円形の斑点ができる病気で、病状が進行すると落葉します。本病は発生初期の薬剤防除効果が高いので、発生が見られたら早期に**トップジンM水和剤、ベンレート水和剤**等の薬剤を散布しましょう。今年は発生が多くなっていますので、注意しましょう。



薬剤名	希釈倍率	使用液量	使用時期	使用回数
トップジンM水和剤	1,500～2,000倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	4回以内
ベンレート水和剤	2,000～3,000倍	100～300L/10a	収穫7日前まで	4回以内

**茎腐病・白絹病は、連作を避け、他作物と輪作して、被害の軽減に努めましょう！**